

優秀賞論文要旨

日本における、同性愛者が抱える生きづらさ

胡桃澤 佑 衣

私は「同性愛者が抱える生きづらさ」に着目して研究を行った。私は同性愛者、レズビアンとして生きてきたが今はこの個性に一切の抵抗がない。しかし世界には、同性愛者であるが故の生きづらさを抱えながら生きている人も少なくない。そこでこの論文ではその生きづらさと、原因、そして解決法を探った。

この論文では、主にオートエスノグラフィーという研究方法を用いた。幼少期からの記憶を全て辿り、性的指向（どの性別の人に性的に惹かれるか、または惹かれないかという指向）に関する出来事やその時の気持ちを細かく書き出した。改めて当時の自分の気持ちになってみて、当時誰にも言えなかったことや思い悩んでいたことも含めて全て書き起こした。次に、家族と友人にカミングアウトをしたうえでインタビューを行った。先行研究のために読んだ、同性愛者の様々な経験談が記載されている本には「カミングアウトがきっかけで家族関係に亀裂が入った」「親に絶対に認めないと言われた」などといった経験も多かった。そこで、私がカミングアウトを行い相手に率直な気持ちを聞くことで、非当事者側の意見を探った。

オートエスノグラフィーの結果として、私は三つの生きづらさを経験していたことが分かった。まず一つ目は、友達の話が理解できないことである。小学校高学年あたりから、好きな男の子の話をしたり、青春映画でときめいた男性のシーンを語り合ったり、そんな周りの話に私は一度も共感できなかった。「好きな男の子ができたことがない」という自分が周りの友人とは違った変人

だと思い、焦り、クラスの人気な男の子を対象にして「私はあの子が好きだ」と無理やり思い込ませていた時期もあった。

二つ目の生きづらは、親友との縁が切れたことである。同性の人との失恋を経験した私はどうしても一人で抱えることができずに、当時、誰にも言えないお互いの悩みさえも相談しあってきた仲の親友に打ち明けた。しかし実質的には突然のカミングアウトとも言える相談に、親友は驚き、言葉を失い、それ以降連絡を取ることはなくなってしまった。これがきっかけとなり、「自分が同性愛者であることは誰にも言うてはいけない」と思うようになった。

三つ目の生きづらは、誰にも言えないが故の孤独感が大きかったことである。一番の理解者であり何でも相談できる家族にさえ言うことができず、どんなに悲しいことがあっても友人にも相談できずに学校では平静を装って過ごさなければいけないことが辛かった。

しかしそんな私が自分自身の個性を理解し、受け入れることができたのは同性愛者のカップルによる YouTube チャンネルとそのコメント欄、同性愛を描いたドラマや映画のおかげである。レズビアンという性的指向は一つの個性であり、自分以外にもたくさん存在していて、幸せに暮らしている人もいるという事実に救われた。

また、カミングアウトの結果として、友人たちの反応は全てポジティブであった。好きな同性愛者の YouTuber がいたり、お気に入りのドラマや映画があったり、周りに同性愛者の友人がいたり、同性愛者という存在が身近で抵抗がないようだった。反対に、母の反応はポジティブではなかった。「よく分からない」「いつかは男の子を好きになれると思う」と言っていた。しかし詳しく聞いてみると、母の辿った「男性(父)と結婚し、家庭を築く」という道が幸せだからこそ同じ道を辿れば私も幸せになれるのではないかと思い、男性との恋愛を期待していたということが分かった。友人たちと母のリアクションの違いの原因は「同性愛者という存在が身近かどうか」ということである。身近に感じていた友人たちに、そのような良い影響をもたらしたのはメディアの影響が大きいということも分かった。

これらの研究を通じて、同性愛者の抱える生きづらさを少しでも減らすためには、当事者を独りにさせないことが大切であることが分かった。性的指向の中にはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルという個性も存在している。変人ではなく、他にも同じ個性を持つ人はたくさん存在しているということを知っておくことが重要である。そして、この事実をより多くの人に定着させるために、メディアという手段が最適であるという結論に至った。フィクション、ノンフィクション問わずにドラマや映画、YouTube などによって当事者にとっても、非当事者にとっても同性愛者というものを身近に感じさせることができ、性的指向のそれぞれの境界線を曖昧にすることが可能であると考えた。

